



渡辺 大直

江戸時代に日本中で使える通貨制度ができ、庶民がお金を持つことにより経済発展したとする本を読んで、「牛も同じだ」と思った。

奈良時代までは朝廷が管理する家畜。平安時代は牛車を牽く貴族の家畜。そして江戸時代に庶民の家畜になった。運搬や農耕利用が進み、市が立ち、流通がうまれた。

但馬牛では、養父神社の牛市から京都、近江、大阪天王寺牛町、更には泉州、紀州へと向かう流通ルートができた。

その養父神社の牛市の由来について、「養父神社の牛市は、往古に牛が農耕利用されるようになって以来あり、いつからどのように始まったか

誰も知らない」と但馬博労申し合わせの書付(寛政9/1797/年)に書かれている。由来がはっきりしているのは播磨一宮伊和神社の牛市だ。「毎年3月に、五穀成就牛馬安全の御祈禱をしてきたが、今年から3月と8月に御祈禱し、期間中、境内で牛市を開き、牛市開設で得られる運上金を神社修復資金の一助にすることにした」とする社務 大井越後守安黒長戸以下、庄屋連署の文書(文政4/1821/年)がある。その中には売買1頭につき納める金額や牛小屋の利用料金などさまざまな市場ルールも定められている。

「西の番所は備前か備中、東の番所は但馬の牛か、中は出雲か伯耆の国か、隠岐の国から牛積んだ船は淀江の浜につく」と唄われた、山陰最大の牛馬市大山博労座。ここは大山寺の高僧基好上人が牛馬安全の守り札を配り、牛馬を連れて参詣する信仰が始まり、次第に牛馬の交換や売買が行われるようになり、享保年間(1726年頃)に大山寺が牛馬市を開設するに至ったと伝えられる。

伊和神社の牛市も大山博労座も、牛馬の安全を祈願する信仰から、そこに集まった人々の間で交換や売買が始まり、神社やお寺を維持し、祭祀を行う資金源にもなる市に発展した経緯が似ている。養父神社の牛市も同様の経緯で始まったのだろうか。

市に集まる家畜商(博労)により流通ルートができ、天王寺牛町を仕切る大博労石橋孫右衛門家に伝わる『相牛秘伝』に「種牛は内国にては但馬牛に限るといえども次のところを第一とす、大城谷(現小代)、八木谷、大屋谷」とあるような産地評価につながる。そしてその石橋孫右衛門と但馬博労の間で、宝暦6(1756)年から天保年間(1840年頃)まで続く訴訟戦も起こる。

牛市は経済活動の場となり、信仰から始まったことなどすっかり忘れられ、「養父神社の牛市は、いつからどのように始まったか誰も知らない」となったのだろう。

だが養父神社の牛馬安全のお守りは今もある。

■筆者プロフィール■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。



但馬牛を売買する牛市が開かれていた養父神社

養父神社牛市の由来